

教育の質保証のための新領域・教職系列の取り組み

新領域・教職系列
担当：楠美 順理

文部科学省は教育の質保証を求めている。本学でも、平成17年11月25日付で授業改革専門委員会が「成績評価の標準化・厳格化」をめざし、成績評価分布一覧を作成し、各学部長に毎年報告することを教務課に求めた。成績評価分布一覧の作成と送付はされているものの、「成績評価の標準化・厳格化」のために踏みこんだ取り組みは特にされて来なかった。

筆者が（科目の性質に依らない負荷量であると推定できる）毎回の授業を180字程度で要約させる課題を出したところ、提出割合は6割に留まった。機械的に4割をDにすれば他科目に比べて極端に厳しい科目となってしまう。「成績評価の標準化・厳格化」がなければ、成績評価の甘い科目への履修者の集中といった問題や、十分な教育成果がないまま学生が単位取得・卒業をしてしまうという問題が起きかねない。単位認定を含む成績評価は、学生の学習意欲を促すこと、ひいては教育の質保証に貢献できる手段ではあるが、教員間での成績評価に関する連携がなければ十分な効果は得られない。

これに対し、従来から成績評価の権限は担当教員だけに裁量があることで、他者が干渉できないことであるかのように扱われてきた。成績評価については、S～Fとそれぞれの点数の対応についてのみ指針はあるものの、S～Fの成績分布全般については教員間、教務課との間には何の指針もない。赴任した頃に、参考となる基準がなくて戸惑ったのは筆者だけではないと聞く。

これらから、各教員の成績評価の権限を侵さない範囲で「成績評価の標準化・厳格化」をめざす取り組みを、当系列の新領域科目担当者及び関連非常勤講師が平成26年度春学期以来、毎学期自主的に行ってきた。

取り組みの内容は、図に示したフォーマットの成績評価報告書を作成・共有し、有志が必要に応じて振り返りの会議を行うというものである。

「成績評価の標準化・厳格化」は目標GPAの設定等によって画一的に成し遂げられるものではない。例えば、GPAが高くても、たまたま意欲的な学生が集中した可能性、教員が学習の動機づけに成功した可能性、結果として全学生が好成績を修めた可能性があり得る。逆についても同様である。概して少人数教育では教育効果を上げやすいということもあろう。これらから、成績分布の数値だけではなく、成績評価の中身、教員の手応え、履修者数に関することを自由記述で作文し、共有することとした。具体的な成績評価については、強制のない取り組みである。

当初は関わった全員が前向きだった訳ではなかったが、結果的に標準化・厳格化されてきたことは担当者が全体として評価しており、作業もルーチン化されたためごくわずかにとどまっている。あくまで目安として、少人数クラスを例外とし、GPAは2.0程度を目指すことも途中から自然に決まった。

この取り組みは、科目群単位、学部単位で行えれば効果的である。まずは、新領域科目群全体へ、そして、学部、全学へとこの取り組みが広がることを願う。

【記入例】	年 月 日			
	氏名			
	年度 学期授業運営報告書			
科目名	環境科学B	環境科学B	環境科学B	環境科学B
時間とキャンパス	木1室	木2室	木3室	金1室
履修学生数	210	60	0	0
平均出席人数	130	30	0	0
S	10			
A	20	10		
成績ごとの人数分布	B	30	10	
C	40	10		
D	50	10		
(人、%)	F	60	10	
GPA	0.952380952	1.666666667	#DIV/0!	#DIV/0!
成績評価上の工夫(全クラス共通)				
クラスごとの事情、その他補足				